

## 身体表現を取り入れた参加型音楽コンサートの可能性 ーカノンの理解を目指した「追いかっこしよう」の事例からー

An Audience-Participatory Concert Emphasizing Physical Expression :  
A Case Study Promoting an Understanding of Polyphonic Music

菅 道子

KAN Michiko

(和歌山大学教育学部音楽教室)

### 抄録

本稿は、音楽理解における身体表現の有効性について、小学校低学年の児童を対象とした参加型音楽コンサートの企画、実施を通して検討したものである。とりわけ今回は、音楽テーマの明確化と「参加型」から「協同創造型」へと発展するようプログラム構成上の工夫を課題とした。音楽テーマにはカノンを取り入れ、「協同創造型」の具体策としては、「音楽は言語とリズム、運動の自然なあられ」という発想から生まれたオルフの原初的な音楽活動を取り入れた。実施した和歌山市立貴志小学校でのコンサートにおいて、カノンの主題を理解するための旋律線の手なぞりや図形楽譜の導入など身体感覚を活用した音楽活動は、低学年の児童にとって難解な部分があったものの、集中的聴取を促進するものであることを指摘した。また輪唱の重なりをフォーメーションで表わす身体活動は音楽表現から遊びへと転じ、歌い役、聴き役の境界を越えた「協同創造型」の音楽を実現していたことを指摘した。さらにこうした音楽活動に内包された遊びが、児童らのことばと動きによって新しい音楽を生み出す源になっていたことを指摘した。

キーワード：身体表現、カノン、アウトリーチ、協同創造、オルフの音楽教育

### 1. はじめに

筆者らは、1999年以降に、本学教育学部の専門科目として【芸術教育普及活動論演習Ⅰ】、【障害児のための芸術教育基礎論】の2つの授業を開設してきた。これらは、参加型音楽コンサートの企画・運営を授業内容とし、そこでの児童・生徒への理解、音楽内容についての理解とその提示方法の検討を通して指導者としての力量形成を図ろうとしてきたものである<sup>1</sup>。また、上記授業では、特に、障害児を対象とし、彼らへの音楽文化の伝え方と音楽を通しての障害児の発達支援のあり方という点から検討してきた。しかし、そこで得た知見、即ち音楽文化の伝え方を聴き手の立場から捉えなおし、演奏者と鑑賞者との相互関係を音楽の協同創造者として再構築するという考え方は、障害児に限らず、多くの児童・生徒にも応用できるものであった。

そこで、これまでの実績のもと、小学校低学年を対象にした参加型コンサートのパイロット版を作成し、児童にとっての身体表現を取り入れた音楽理解の可能性について検討を行った。これは平成18年度研究支

援経費の一部を活用し、実施したものである。また音楽指導については上記授業の協同授業者の一人である山名敏之氏の協力を得て行った。

### 2. 参加型音楽コンサートづくりの条件

#### 2.1. これまでの成果と課題

1999年より実施してきた参加型コンサートは、〈アウトリーチ outreach〉の考え方を取り入れたものである。アウトリーチは「より遠くへ達すること、通常の活動範囲から踏み出すこと」を原義<sup>2</sup>とする芸術普及の考え方を指している。その中には「芸術を提供してあげるという、芸術家と享受者間の上下関係が存在するようなものではなく、享受者の立場を尊重し、芸術家と享受者が対等な立場で交流し、芸術を楽しむという態度」を根本に置く考え方があり<sup>3</sup>、筆者らの授業実践はその理念に学ぼうとするものである。

筆者らは、これまでの実践を通して、参加型コンサートを成立させる要件として以下の4点を抽出した<sup>4</sup>。

(1) スタッフの多様性（複数専攻の学生）の確保

- 〈2〉ストーリー性（相互の関連性）をもったプログラム構成
- 〈3〉音楽テーマの明確化
- 〈4〉「参加型」から「協同創造型」への発展

〈1〉、〈2〉はこれまでのコンサート作りを通してその必要性和成果を確認したもの、〈3〉、〈4〉は十分に達成できていない課題として出てきたものであり、今回のパイロット版作成において具体策を検討することとした。〈3〉音楽テーマの明確化については、カノンを中心にした多声的音楽の理解をテーマとし、〈4〉については、演奏者と鑑賞者の協同創造への具体的方法としてオルフの提示する音楽教育論から示唆を得ることとした。

## 2.2. 音楽テーマの明確化：カノンの理解

〈3〉音楽テーマの明確化として取り上げたのはカノンである。カノン（canon）は、厳格な模倣様式による多声楽曲の形式およびその技法を指す用語である<sup>5</sup>。このカノンは複数の声部が、それぞれの独立性を保持しつつ動くポリフォニーの特質を示すように<sup>6</sup>、各声部の独立性と模倣性は旋律線の動きや重なりを理解するには最適である。また輪唱など単純で美しい曲も多いため、誰にとっても親しみやすい音楽である。

そこで、コンサートでは、①パッフェルベル作曲《カノン》、②J. S. バッハ作曲《インベンション1番》、③モーツァルト作曲《わが愛する人よ KV.562》、④フランス民謡《鐘がなる》、を取り上げた。

①は認知度の高いカノンであり、また音楽教科書にも器楽合奏《カノン》（東山正流編）や主題をモチーフにした三部合唱曲《遠い日の歌》（橋本 祥路作曲、岩沢 千早作詞）に編曲された楽曲などが掲載されており<sup>7</sup>、親しみやすい鑑賞曲として選曲した。演奏時間は3分程で、演奏媒体はオーボエとアルトサクソである。

②はカノンの形式ではないものの、対位法で書かれた2声の多声音楽であり、主題が右手と左手とに交互に表れるため、旋律線が聴きとりやすいと考え選曲した。演奏時間は2分半程度、演奏媒体は電子ピアノの音色をオルガンにしたものである。

③は3声からなる声楽のカノンで、最初の主題が11小節と長く、他の声部との重なりを厳密に聴きとるのは難解であるものの、旋律は叙情的な美しさを有しており、演奏時間も2分余りで鑑賞時間として適当であるため選曲した。

④の原曲はフランス民謡《フレールジャック（Frère Jacques）》で、日本では《鐘がなる》の他、《グーチョキパー》など、いくつかの遊び歌に翻訳され伝承されている。《鐘がなる》は、2部の輪唱（カノン）となっているが、8小節ともトニックの和音で進行するため、

8部まで拡大しても輪唱を楽しむことができ、また和音の変化がないため動きを取り入れながら歌うのにも適した曲として選曲した。

上記のように主としてカノンの形式をもった楽曲の鑑賞と歌唱によってプログラムを構成し、重なる旋律線を理解し、味わうこと、即ちカノン（多声音楽）の理解をコンサート全体のテーマとして設定した。

児童に対しては主題の模倣や時間差で流れる独立した旋律線の動きを聴きとったり、あるいは自らが表現してもらうために「追いかけてこしよう」というテーマで提示した。

## 2.3. 「参加型」から「協同創造型」への発展：オルフの音楽教育論（ことば、音楽、動き）から得る示唆

〈4〉の音楽コンサートを「協同創造型」へと発展させるために取り入れようと考えたのはオルフの音楽教育論である。カール・オルフ（C.Orff 1895—1982）は現代ドイツの代表的な作曲家であり、独自の音楽教育の理念と方法を『オルフ・シュールベルク』（全5巻）の作品などを通して提示し、日本にも1960年代に多大な影響を与えた人物である。オルフの音楽教育論の中心的概念は原初的な音楽〈エレメンタルムジーク〉であり、オルフは「エレメンタルな音楽は決して音楽単独ではありえず、必ず踊りとことばが付いている。それはだれでも演奏でき、聞き役にまわらず、弾き役に加わる音楽である」と総括している<sup>8</sup>。彼は単純なリズムや旋律のオスティナートを軸として、ロンドやカノンなどの形式をもった楽曲を数多く作曲した。そこでは上記説明にあるように、音楽とともにことばと動き（踊り）がある原初的な音楽と、誰もが聴き手にもなり、弾き手にもなり、音楽の作り手にもなるという演奏者と鑑賞者という境界を超えた人と人との対等な関係性が重視されている。この理念は、〈4〉のコンサートを単なる「参加型」から「協同創造型」へ発展させるために、有益な示唆を与えるものである。コンサートの後半では音楽と動きに重点を置いたプログラムを工夫し、一方的な聴き手や弾き手としてではなく、協同創造の主体として双方が居る場を設定しようと考えた。また音楽と動きの世界が崩れないように、オルフが提示した楽器、グロッケンシュピール（鉄琴）とシロフォン（木琴）によるオスティナート伴奏を加えることとした。その他、鑑賞の際にも旋律線の動きや重なりを捉えるために手で音楽の動きをなぞるなど、音楽要素の理解を身体感覚を通して体感できる活動を設定した。

## 2.4. 視覚支援物の活用

上記の音楽を身体感覚で捉えることを円滑に進めるために、①図形譜の活用、②パペットの活用を行った。

①は耳で聴いた旋律線を目でも確かめながら表現す

るための支援として、②は低学年の児童が興味をもって旋律線の動きを理解できるための工夫として取り入れた。

学習課程芸術文化プログラム音楽専攻予定生の計6名であった。授業としてではなく、自主的な参加であったため、コンサートは、昼休み、空き時間等を使い、7回ほど打ち合わせと練習の時間をとり(2007. 01.12, 01.16, 02.05, 02.26, 02.13, 02.14, 02.23, 03.02)準備を進めた。後半の音楽の練習とリハーサル、本番には山名氏にも参加してもらい、学生たちへの指導・助言を得た。

### 3. 「追いかっこしよう」のコンサートの実施

#### 3.1. コンサート実施までの経過

コンサートに参加したのは、和歌山大学教育学部学校教育教員養成課程教科教育コース音楽専攻生と生涯

#### 3.2. コンサートの概要

【1. 日 時】 2007 (平成19) 年3月6日 (火) 第4時限目 11:40~12:25

【2. 場 所】 和歌山市立貴志小学校 視聴覚室

【3. 対 象】 2年1組 34名 (担任 木下由香利)

【4. 演奏・話し手】

学校教育教員養成課程教科教育コース音楽専攻4名、生涯学習課程芸術文化プログラム音楽専攻予定2名

【5. テーマ】 「追いかっこしよう」

表1 「追いかっこしよう」コンサートの流れ

構成	コンサートの流れ	具体的な活動	♪音楽, ♪楽器 ◆支援物 ◎身体表現・留意点	児童の様子
導入	1. 入室と挨拶	①挨拶とグループの紹介		・8つのグループになってすわる。
鑑賞1	2. オーボエとサクソフーンによる音楽の追いかっこ	② 楽器 (オーボエとサクソフーン) の紹介 ③ 曲の紹介と「曲のきまり (ルール)」を見つけるためのクイズ ・T「これから演奏するパッフェルベルの《カノン》という曲には《曲のきまり (ルール)》というものがあります。そのきまりは何か、黒板に貼った3つの中から答えとなるものを考えながら聴いてください。」 ④ サクソフーンとオーボエの演奏 ⑤ クイズの答え合わせと説明 ・〈1〉ではユニゾンでメロディーを演奏、〈2〉では、ランダムに不協和になるように演奏、〈3〉旋律が追いかっこになっていることを強調しながら最初の8小節を演奏。	◆揭示 〈1〉 いっしょに進もう、〈2〉 ばらばらに進もう、〈3〉 追いかっこして進もう  ♪ 《カノン》 (パッフェルベル作曲) ♪♪ オーボエ アルトサクソフーン	・静かに演奏を聴いている。  ・3分の2ほどの児童が〈3〉に手をあげる。
鑑賞2	3. ピアノによるメロディーの追いかっこ	⑥ ピアノによるメロディーの追いかっこ (対位法) の構造を説明 ・T「今度は、一人の人が演奏します。一人でも追いかっこできるかな?おさるの聴くぞう君に聴いてみよう。」 ・聴くぞう「このテーマを歌ってみるね。(図形譜をたどりながら) タララ、タラタラ、タ、・・・」 ⑦ 児童たちの主題歌、旋律線の手なぞり。 ・聴くぞう「今度はみんなも絵マップをみながら一緒に歌ってみて、さんはい・・・上手だね。」 ・T「そうしたら、あひるの静かちゃんにもでてきてもらって、2つに別れます。そして今度は黒板の絵マップにあわせて手を動かしながら、どんな	◆パペット おさるの聴くぞう ◆図形譜 ♪ 《インベンション1番》 (J.S.バッハ作曲) ♪♪ 電子ピアノ ◆パペット あひるの静か ◎ 学級を2つに分	・やわらかい声でタララ、タラタラを歌うことができる。 ・絵マップをみながら旋律線を手でなぞることも上手にできる。

		<p>ふうにタララ、タラタラが追いかけてこしてるのか、一緒にやってみよう。」</p> <p>・8小節目までをゆっくりピアノで弾きながら、児童たちは静かちゃんと聴くぞうくと合わせて旋律線を手でなぞる。</p> <p>⑧ ピアノの演奏</p> <p>・T「では、今のメロディーがどんなふうに出てくるのか、今度は最後までピアノを弾いてもらうので聴いてください。」</p>	<p>けて、対になって出てくる旋律線を手で描く。</p>	<p>・演奏中は聴くことに集中している児童が多かったが、主題のフレーズが出てくるのにあわせて手で旋律線を描く児童も数人みられた。</p>
鑑賞3	4. 声による追いかけて	<p>⑨ 声による追いかけて カノンの説明</p> <p>・T「今度は声で追いかけてこをする曲を聴いてもらいますね。最初にどんなメロディーが出てくるのか、あひるの静かちゃんにあの絵マップにあわせて歌ってもらいます。……」</p> <p>⑩ 児童たちの主題歌い、旋律線の手なぞり。</p> <p>・T「きれいだった?では、今度はみんなも静かちゃんと一緒に歌ってみてください。……上手に歌えたね。」</p> <p>⑪ 3部輪唱の演奏</p> <p>・T「これから3人で追いかけてこの歌を歌います。このテーマのメロディーがどんなふうに出てくるか、耳をすませてきいてくださいね。テーマがでてきた時には、このチューリップのお花を歌っているお姉さんの前におきますね。では聴いて下さい。」</p> <p>・演奏・</p> <p>⑫ 主題テーマについての確認</p> <p>・T「テーマ聴こえましたか? 全部で何回でできましたか?……そうですね。チューリップが5つあるけど、その数だけテーマが出てたんだね。よくわかったね。」</p>	<p>◆パペット静か</p> <p>◆図形譜</p> <p>♪《カノン わが愛する人よ》(モーツァルト作曲)</p> <p>◆テーマを示す絵図</p>	<p>・一緒に手なぞりをしながら歌うことができる。</p> <p>・静かに聴いている。</p> <p>・「5回」と答える児童がいた。</p>
表現1	5. 一緒にカノン《鐘がなる》を歌おう	<p>⑬《鐘がなる》と一緒に歌い、輪唱にすることの説明</p> <p>・2小節ずつ、先唱、模唱という形で歌う。</p> <p>⑭ 2部に別れての輪唱</p> <p>・T「上手に歌えたね、そうしたら今日はたくさん追いかけてこの歌をきいてきたけど、みんなも2つに別れて追いかけてこの歌をしてみようね。」</p> <p>・T「上手だね。追いかけてこしたのわかった?」</p> <p>⑮ 4部に別れての輪唱</p> <p>・T「そしたら、今度は4つに別れて挑戦してみよう。」</p> <p>⑯ 8部に別れての輪唱</p> <p>・児童からのリクエストで8つに別れて輪唱する。</p> <p>・……8部輪唱……</p> <p>・終わったグループのリーダーが座り、終わったことを視覚的に確認できるようにした</p> <p>・T「上手だったね。今度も追いかけてこしているのがわかったね。」</p>	<p>♪《鐘がなる》(フランス民謡)</p> <p>♪♪</p> <p>グロッケンシュピール (鉄琴)</p> <p>シロフォン (木琴)</p>	<p>・「ええっ!」と歓声をあげて、期待しながら輪唱する。</p> <p>・歌い終わったあとには、満足の歓声があがっていた。</p> <p>・児童から「今度は8つに別れてやる」とリクエストがあり、「木下先生が入ってやって1,2,3,4……」と大人の人数を数えて、8人いることを確認。</p> <p>・最後のグループが終わると大拍手となった。</p>

表現 2	6. カノンにあわせて動いて形をつくろう	<p>⑰ フォーメーション作りながら歌うことを説明 T. 「天才だね。それでは今度は立って体もつかって歌ってみよう。2つに戻ってやってみよう」</p> <p>⑱ 内円と外円を作りながら2回輪唱 ・2班に別れて、二重円に近いものを作り、内円と外円は動きの向きを反対にし、右回り、左周りで回った2回</p> <p>⑲ うずまきの作成とほどこきで4回輪唱 ・4回 2班にわかれて渦巻き上に内にはいりながら2回歌い、2回で戻り、大きな一円にする。 ・右足、左足を強く踏みすぎて、音楽が重くなってしまった。 ・T 「テンポを早めて、もう一度やってみよう。」 ・軽快な動きと音楽になったものの、円が崩れて、カオスになった。</p> <p>⑳ 8班に分かれて整列 ・担任 「それでは、班ごとにならんでください」</p>	<p>♪♪ グロックンシュピール (鉄琴) シロフォン (木琴) ◎ 2班に分かれて二重の円のフォーメーションづくり ◎ 渦巻きのフォーメーションづくり</p>	<p>・「ええっ!!」とまた歓声がおこる。</p> <p>・立って列をつくると騒がしくなった。</p> <p>・うずまきになる時には、右足、左足を両方とも強く足踏みし過ぎてしまう。</p> <p>・テンポを早めると興奮してしまい、多少騒然とした状態になった。しかし、楽しそうに歌い、円を作った。</p> <p>・自分たちで「前ならえ」「なおれ」「すわれ」と《鐘がなる》の旋律に替え歌をしながら、グループでの整列を行い、着席した。</p>
ま と め	7. おわりの挨拶	<p>㉑ 終わりの挨拶 ・T 「みんな、最後の整列も上手にできたね。おかけっこして楽しかったね。ありがとうございました。」</p>		<p>・さらに《鐘がなる》の旋律に「ありがとう、ありがとう、さよならね、さよならね。」の替え歌を歌っていた。</p>

### 3.3. コンサートの経過

実施した和歌山市立貴志小学校(田中英明校長)は、大学から5分ほどのところにある小学校で、日頃から教育実習、教育ボランティアなどで交流のある小学校である。2年1組の担任は、2006(H18)年度のフレンドシップ事業の共同研究者でもあり、協力を依頼した。

コンサートは2年1組の音楽の時間に視聴覚室で実施した。通常音楽の授業は担任が行っており、4、5人1班で8つの班に分かれてグループ学習を行っているということを事前に聞いていたため、その班を活用する形でコンサートを進めた。

### 4. 考察

上記コンサートの経過と児童らの感想を通して、「追いかけてこしよう」のコンサートにおいて、先に設定した音楽テーマの明確化、協同創造型への発展がどのように実現できているか、また今後の相互交流を充実させたコンサートづくりにおいて得られる示唆は何かを検討したい。

表2は、コンサート終了後に担任が用紙を配布し自由記述で書かれた感想を曲ごとの記述に整理したものである。

表2 コンサートについての児童の感想

番号	児童の感想	人数
1	オーボエとサックスの音がきれいだった。	18
2	オーボエやサックスの演奏はすごかった。	5
3	オーボエやサックスの楽器を初めて見る事ができた。	9
4	オーボエやサックスの演奏はむずかしかった。	2
5	オーボエとサックスがとてもふしぎな音がしました。パッププップパとか聞こえました。なんかびっくりしました。	1
6	オーボエは手が早く動いていたのでどうやって、やっているのかわかりませんでした。	1
7	カノンはサックスの音が大きかった、オーボエもサックス音が高かった、オーボエの音は小さかった等 音の音量、高低に関するもの	5
8	ピアノの音色はきれいだった。	10

9	ピアノの演奏では絵がよくわかった。	1
10	ピアノの演奏は勉強になった。	1
11	ピアノの演奏は難しそうだったがすごかった。	2
12	ピアノの演奏につける手の動きがむずかしかった。	1
13	ピアノにあわせて手を動かすだけで楽しかった。	2
14	モーツアルトの歌はよくわかりました。声が高くなったりひくくなったりしてよくわかりました。	2
15	モーツアルトの歌はそろっていた、きれいでした。	16
16	モーツアルトの歌は高い声ので、すごかった、うまかった。	3
17	モーツアルトの歌は、おもしろかった。	1
18	モーツアルトの歌の絵が少しわかりにくかった。	1
19	《鐘がなる》の追いかけてこはおもしろかった、楽しかった。	14
20	《鐘がなる》をみんなで歌って楽しかった。2年1組のみんなが急に替え歌を歌いしました。	1
21	《鐘がなる》では体を動かして楽しかったです。	1
22	《鐘がなる》ではうずまきになって楽しかった。	2
23	《鐘がなる》のおいかけてこは少しむかしかった。	1
24	《鐘がなる》をすぐに覚えることができました。	2
25	《鐘がなる》は最後ちょっとばらばらになってしまったけれども、きれいだった。	1

#### 4.1. コンサートの構成と演奏者について

第一に、先にあげた参加型コンサートの4つの要件に照らしてコンサートの構成をみると次の特徴があげられる。

(1) スタッフの多様性については、過去実施してきた体制と比べると、音楽専攻生のみで、他の専攻生(美術、書道、障害児教育など)は不在だったために、視覚支援物やステージの工夫は十分にできなかった。しかし、演奏はオーボエ、サクソ、ピアノ、声楽と複数ものを選曲できる体制がとれたため、鑑賞部分の充実を図ることができたといえる。また、6人の参加者は、このコンサート実施前の2006年11月28日(火)に和歌山大学教育学部附属養護学校(現 特別支援学校)の開校30周年式典の第2部で記念コンサートに参加した。演奏とその楽曲についてのコメントを添える形のものであったが、聴き手にわかりやすく伝えるために必要なコメントについて考えるという経験をしていた。またその中の2名はさらに2006年芸術教育普及活動論演習Ⅰにも参加していたため、児童との接し方など経験をもっていたことも、彼らとの交流を円滑する要因になっていたと考えられる。

(2) コンサート構成のストーリー性の確保については、今回は要件からはずし、それよりも(3)音楽テーマの明確化として、カノンを取り上げ、音楽活動の相互の音楽的関連性を重視することとした。

今回、カノンを音楽テーマとして明確にしたことで、児童たちは「追いかけてこ」している音楽の鑑賞と児童たち自身の輪唱表現とを一貫して経験することができた。また低学年の児童にとっては、具体的登場人物の出現は興味の沸くものであり、児童の感想(音楽以

外のことで、表に掲載していないもの)の中にも、「聴くぞうくんがかわいかった」「静かちゃんと聴くぞうくんは『静かに聴くぞう』だったんだね、その秘密がわかった」「しずかにきくぞう、楽しかった」といった記述が複数見受けられた。登場人物の案内や活動によってコンサートが進行していくストーリー性をもった構成についても音楽内容の関連性ととも両立できれば、より統一性のある構成になるはずであり、今後は双方を両立させるプログラムの工夫が課題である。〈4〉「参加型」から「協同創造型」への発展については、後に詳述する。

#### 4.2. 聴く経験の確保

第二に、コンサートの経過を見ると、この会が児童にとって何よりも音楽を聴く場として重要であったことがあげられる。

No.1, 2, 8, 15, 16の「音がきれいだった」「演奏はすごかった」という感想をもったように、「聴く」という経験そのものに純粋に満足を感じている児童たちが多かったことがわかる。No.4やNo.11の「むずかしそうだった」やNo.5「とてもふしぎな音がしました。パップパップパとか聞こえました。なんかびっくりしました」やNo.6「オーボエは手が早く動いていたのでどうやって、やっているのかわかりませんでした」なども演奏技術に対する驚きや賞賛である。No.3は初めて遭遇した楽器に関心をもったことが示されている。こうした音色の美しさを感じたり、早い動きに「びっくりした」という印象的な感じ方であっても、児童が日頃、見たり聴くことの少ない楽器に触れるという経験は、アウトリーチ(芸術普及)の導入としての目的を果たしているといえるだろう。少し古いデー

タではあるが『国民の文化に関する意識調査（児童・生徒編）』（2000年）によれば<sup>9</sup>、「芸術文化の『鑑賞』に対する関心」については、「関心がある（とても、どちらかといえば）」との回答は小学生64.4%、中学生60.6%、高校生77.7%と高い比率を示していた。「最近1年間の芸術文化の鑑賞活動」について、「鑑賞した」と回答した小学生は55.6%、中学生は58.5%、高校生では70.8%であり、多くのものが芸術文化の鑑賞を経験していた。その「鑑賞のきっかけ」については「学校の授業の一環で」という回答が小学生29.4%、中学生35.0%、高校生47.3%と高い比率であった。また「鑑賞の際に困ること」では、小学生では「会場が近所がない」が最も多く19.0%、「保護者が一緒にいてくれない」が16.4%であった。中・高生では「切符が高すぎる」が最も多く中学生33.7%、高校生39.8%であった。上記データをみると、子どもたちがせっかく芸術文化に関心をもっていても、施設の有無や切符代が鑑賞の機会を妨げる要因になる中で、学校での授業や行事は、芸術文化の鑑賞の貴重な場となっているということが伺える。

#### 4.3. 音楽理解を促進する手の動きと視覚支援物

第3に音楽理解を促進する手だてとして身体表現としての旋律線の手なぞりや視覚支援物が有効であったことがあげられる。

それは、旋律線を図形楽譜であらわし、それを歌ったり、手でなぞって主題の理解を図るというものである。

表1の「3. ピアノによるメロディーの追いかけてこ」の活動⑥では、《インベンション1番》（B.S.バッハ）の主題を理解するために、図1の楽譜の主題部分を図2のような図形楽譜で表し、これにあわせて、パペットのおさるの聴くぞうくと、あひるの静かちゃんが黒板上の図形の流れにあわせて動きながら「タララ、タラタラ、ラ」と歌った。次に活動⑦では、児童たちも一緒に歌ったのちに、手でその旋律線をなぞり、右手と左手に主題が8度の模倣ででてくることを確認する活動を行った。

また、「4. 声による追いかけてこ」の活動⑨のところでは《カノン 我が愛する人よ》（モーツァルト）

の最初の主題を理解できるように図3の楽譜の主題部分を図4のような図形楽譜で表し、同じように聴くぞうくんが図形の流れに合わせて動きながら歌い、活動⑩では、それに児童が続いた。そして活動⑪の実際の演奏の時には5回あらわれるテーマが確認できるようにテーマが出現する際に、歌い手の譜面台前に花のカードを置き、テーマの重なりがわかるように視覚化して示した。

記録映像全体を見ると児童たちは、こうした活動を楽しそうにパペットの静かと聴くぞうとともに進んでいた。また、この主題の理解をした後に演奏がはじまった時には、主題が出てくると小さく頷いたり、自然に手で旋律を描く児童の姿も何人か見られた。身体感覚にアプローチする活動は、旋律の中の主題を取り出し主体的な聴取を引き出すことを十分可能にするものであった。

しかし、実際に身体感覚と視覚支援物を使った音楽理解の活動について、感想を記した児童は少なかった。児童の感想No.9では「絵がよくわかった」、No.10「勉強になった」と図形譜が旋律の動きを知るのに有効であったこと、No.13では「手を動かすだけで楽しかった」と身体を使うことへの興味を各1名ずつの児童が記している。反対にNo.12は「手の動きが難しかった」、No.18「歌の絵が少しわかりにくかった」と感じた児童も各1名ずついた。No.12、18の感想があるように、低学年に対して2曲ともにこうした知的理解を図る活動を続けることは、負担が多かったかもしれないとの意見が学生から出された。また、上記のコメントは学習として手の動きを体験したことを示している。このコンサートが授業時間内への訪問コンサートであり、カノンの理解という明確な教育的目標を設定していることから、学習としての認識は当然かもしれない。しかし、コンサートとして日常の授業から分離した、特別の場として設定するのであれば、学習と意識化しないうちに音楽を楽しみ、理解することのできる工夫がさらに必要である。

#### 4.4. 新しく生まれたことばと動き、協同創造の根源は遊び

第4に身体表現を取り入れた表現活動は、新しいこ

図1 《インベンション1番》（J.S.バッハ）楽譜

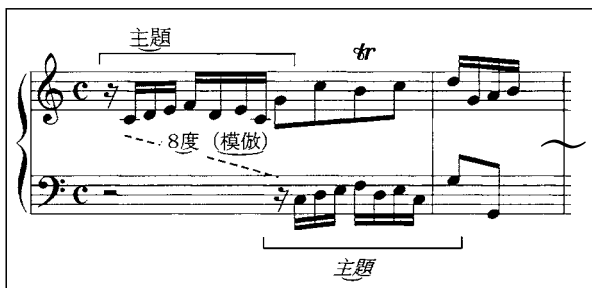


図2 《インベンション1番》主題の図形楽譜

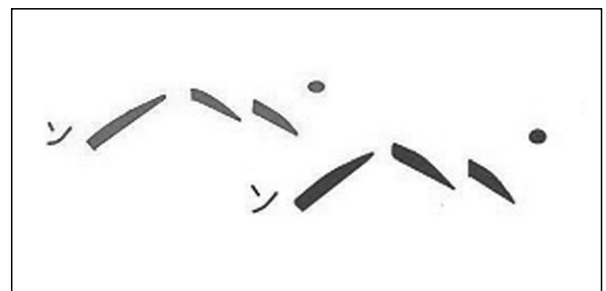


図3 《カノン 我が愛する人よ》（モーツァルト）楽譜



とばと動きと音楽を生み出す力を持ち、協同創造への萌芽を生み出したことがあげられる。

コンサートの後半では《鐘がなる》（フランス民謡）を扱い、「5.一緒にカノンを歌おう」、「6.カノンにあわせて動いて形をつくろう」という身体表現を取り入れた歌唱活動を取り上げた。

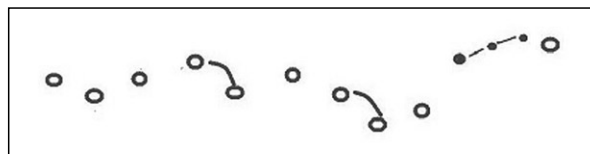
表1の活動⑬では、2小節ずつ、先唱、模唱という形で歌い、活動⑭、⑮では2部、4部の輪唱を行い、さらに活動⑯では予想外の出来事が生じた。児童たちの側から「今度は8つに分かれてやる」とのリクエストがあり、「木下先生が入ってやって1, 2, 3, 4, …」と大人の人数を数え、8人いることを確認し、8部の輪唱に挑戦することとなった。そして最後のグループが終わると大拍手と歓声が起こった。

活動⑰では、2班に分かれフォーメーションを作りながら歌うことを説明し、次に実演に移った。活動⑱では、半円を描くように歩きながら2回ずつ歌い、内円と外円の動きの向きを反対にして、歌った旋律線の重なりを視覚的に見られるようにした。活動⑲では、やはり2班に分かれ、それぞれの班が2回歌いながらうずまきを内側に入りながらつくり、2回で戻り、大きな円にする形態をとった。児童らは友達と手をつないでフォーメーションを作ることに興じていた。しかし、動き方などのシュミレーションが十分でなかったこともあり、うずまきになる時に、右足、左足を両方とも強く足踏みし過ぎ、音楽の流れを崩すことになってしまった。そこで活動⑲の後半では、足踏みを軽くするためにテンポを早めて、うずまきを作りながらも一度輪唱を行った。興奮して多少騒然とした状態になってしまったものの児童と学生とが一緒になって活動することができた。

その後の活動⑳では、担任が「では、そのまま班に戻って並んでください」と言うと、児童たちは再び自然と《鐘がなる》の歌で「並べ、並べ」、「前ならえ、なおい」、「すわれ」と活動の言葉を歌いながら、8つの班に戻り、整列して座るとい音楽活動を作りあげていった。そして最後の一人が座ると、偶然に生まれた自分たちの遊びに大きな拍手を送っていた。

このように、後半の輪唱とフォーメーションづくりの活動では、演奏者と鑑賞者の境界がなくなり、「協同創造」的な活動が始まり、さらに《鐘がなる》の旋律に新しいことばと動きをつけた新しい児童たちの音楽まで生み出されることとなった。その意味で「協同創造型」のコンサートを作るにあたり、身体表現活動

図4 《カノン 我が愛する人よ》主題の図形譜



を取り入れることの有効性は十分に示されたといえる。この自然発生的な音楽創造活動の成立の背景にはどのような要因があるのだろうか。

1つには通常の音楽授業で活用されていた班単位で活動する学級文化が、「追いかけてしよう」の活動の中でも有効に働いたということがあげられるだろう。担任の日頃の丁寧な指導の結果として学級のもつ力が自主的な遊びを生み出したといえる。8部の輪唱への挑戦も班単位の活動習慣から、班としてより高度なものに挑戦してみたいという素朴な欲求となって表れていたといえるだろう。

2つには、《鐘がなる》のフォーメーション作りの活動が、コンサートの表現活動というよりは純粹なる遊びとして児童たちが捉え、それに夢中になったことから新しい音楽が生み出されたといえるだろう。

児童の感想をみても、No.19～22まで、「おもしろかった」「楽しかった」という感想、さらに具体的に「体を動かして楽しかった」「うずまきになって楽しかった」「鐘がなるのおいかけっこが一番おもしろかった」というように、おもしろい、楽しい活動として肯定的に評価する感想が多い。遊びの研究の第一人者であるホイジンガは、遊びの要素となる『おもしろさ』について、「『おもしろさ (aardigheid)』という言葉はそれなりにはなはだ意味深長だ。この言葉が『本性] (aard) から転義して生まれたということの中に、問題はこれ以上さかのぼり得ないという告白が真相を伝えるごとく語られている」と述べているように<sup>10</sup>、これ以上の分析無用な遊びの本質たるものとして、「おもしろさ」を捉えている。さらに遊びは「緊張感と喜びと『おもしろさ』と一緒に与えてくれるものと説明している<sup>11</sup>。児童たちにとって「おもしろい」活動であった輪唱とフォーメーションづくりは声部を合わせることができるといえるのか、うまくフォーメーションを作れるのかという緊張感とそれができた時の喜びとが与えられるものであり、音楽表現であると同時に新しい遊びとして受容されていたといえるのではないだろうか。

またホイジンガは遊びと音楽の関係についても言及し「音楽を楽しむこと自体が遊びの形式的特徴をほとんどすべて備えている。決められた場所で終始し、繰り返しもできるし、秩序、リズム、交代があり、聴衆であれ演奏者であれすべての人をひとしく『ありきたり』の世界からよろこびの感情の中に連れ出すことができる」とし<sup>12</sup>、音楽の終始、繰り返し、秩序、リズムといった内容がそのまま遊びの形式的特徴になると



述べている。カノンの模倣の繰り返し、ずれて開始と終始するといった秩序など、《鐘がなる》の中には、その遊びの形式的特徴が完備されていたともいえるだろう。そしてその音楽表現の中から遊びがはじまり、新しい創造が生まれたということになる。この新しい音楽創造の過程で重要な要素になったのは替え歌のことばであろう。児童たちが整列するための「並べ」、座するための「座れ」という行為を、またそこで感じた「さよならね」「ありがとう」という思いを瞬く間に旋律にのせることができたからこそ、新しい創造が進展したといえる。これはオルフが「音楽は言語とリズム、運動の自然なあらわれである」と述べ<sup>13</sup>、三者の融合によって原初的音楽が生まれると指摘したように、子どもたちの遊びの必然から生まれたことばと動きが新しい音楽を生み出す要素になったといえるだろう。

オルフの作品を教材としながら優れた授業実践を重ねた柳生力は自らの実践を通して「演奏することを英語ではplay、ドイツ語ではspielenと呼ぶことは、演奏することが遊びと一体のものであることをよく示している。この言葉の事実は、音楽学習が遊びでなければ成立しないことを雄弁に示唆している」と述べている<sup>14</sup>。言ってみれば、音楽学習、音楽活動の理想形は、その活動が遊びに転化し、昇華するだけの遊びの内実、それは秩序、リズム、交代といった音楽的特徴であり、同時にそれをする際の「緊張感と喜びと『おもしろさ』」<sup>15</sup>をもってこそ成立するものということになる。《鐘がなる》の活動の中にはそうした遊びの要素が内包されており、児童たちは、聴き役と歌い役という境界を超え、遊び役としてコンサートの提供者とともに音楽の協同創造の担い手になったといえるだろう。

## 5. おわりに

本稿では、参加型コンサートの企画・実施を通して演奏者と鑑賞者との相互交流を「参加型」から「協同創造型」への発展させる手だてを検討した。

この結果、対象者の発達段階への考慮の必要性はあるものの、旋律線を描いたり、音楽形式のフォーメーションをつくるなど身体感覚を使った音楽活動は、音楽理解を促進し、また演奏者と鑑賞者の相互交流を深め「協同創造型」へと発展させる可能性を十分に持ち得ることが明らかであった。こうした「協同創造型」を作り出すには活動の根源に「遊び」が内包されることが不可欠であることもコンサートを通して明らかで

あった。ただし「追いかけてこしよう」のコンサートにおいては、児童たちは、確実に、音楽の担い手になっていたものの、コンサートの提供者たちとの交流からというよりも、児童たち自身の班活動として生み出されていた。「協同創造型」のコンサートの内容と質とを高めていくためには、演奏者と鑑賞者の相互の交流の中でいかに音楽の共同創造が実現できるのか、さらに具体的に検討していくことが今後の課題である。

一方、この参加型コンサートは音楽授業なのか、あるいは芸術普及コンサートなのか、実践者の中でも位置づけは不明瞭なままであり、構成にもその曖昧さが反映されていた。今後それらの活動の性格についても厳密な検討が必要である。

- 1 これまでの実践については以下を参照。山崎由可里・山名敏之・菅 道子『「静けさをさく」ことをテーマにした参加型音楽コンサートづくりの試み』和歌山大学教育学部編『和歌山大学教育学部紀要—教育科学—』第58集、2008年、47-57頁。菅 道子・山名敏之「教育学部における総合的な芸術普及活動の授業の試み—知的障害養護学校における参加型音楽コンサート作りを事例として—」関西楽理研究会編『関西楽理研』22号、2005年、49-63頁。
- 2 神戸女学院大学音楽学部『アウトリーチ通信 創刊号』2006年2月15日、2頁。
- 3 林睦「音楽のアウトリーチ活動に関する研究—音楽家と学校の連携—」大阪大学大学院文学研究科博士論文、2003年、2頁。
- 4 前掲書、山崎、山名、菅、2008年、49-50頁。
- 5 「カノン」下中弘編集兼発行人『音楽大事典』第2巻平凡社、1998年初版第16刷（1982年初版第1刷）、5頁。
- 6 「多声音楽（ポリフォニー）」岡部博編『新訂標準音楽事典トワ』音楽之友社、2000年新訂第1版（1996年第1版）、1806頁。
- 7 器楽合奏の《カノン》は『小学音楽 音楽のおくりもの6』（教育出版、平成13年検定）に、《遠い日の歌》は複数の教科書に掲載されている。
- 8 「オルフ」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社、2004年、97-98頁。
- 9 三和総合研究所『国民の文化に関する意識調査（児童・生徒編）』2000年3月、4-13頁。
- 10 ホイジンガ著・里見元一郎訳『ホモ・ルーデンス』河出書房新社、1971年、14頁。
- 11 同上書、14頁。
- 12 同上書、78頁。
- 13 星野圭朗『オルフ・シュールベルク理論とその実際』全音楽譜出版社、1979年、20頁。
- 14 柳生力『自分のためにうたがあるとき』音楽之友社、1986年、17頁。
- 15 前掲書、ホイジンガ、14頁。